翻訳という世界

船越　隆子
翻訳家

ギネス世界記録　作業は真夏に集中

〈5〉

8月になると、思い出すことがある。何年も過ぎてしまえば、それもまた懐かしかったりするのだけれど、当時は暑い中、けっこうたいへんな思いをした。

もちろん翻訳の仕事の話。

「ギネス世界記録」という本を、2004年版から2008年版まで訳させてもらったことがある。テレビなどでもよく耳にするあのギネス、ありとあらゆる分野の世界一を認定し、一冊にまとめた年刊誌だ。

英語のオリジナル版は毎年9月に発行され、日本語版はそれを追いかけて11月ごろに出る。そのためにはちょうど今ごろ、つまり真夏に翻訳作業をすることになる。

日本語版の出版社が数年前に変わってしまったので今の事情は分からないが、私が携わっていた時には、英語版をそのまま和訳して出すわけではなかった。日本ではどんな分野の記録に興味が集まるか、今年はどのテーマを重点的に取り上げるかなどを考えて、掲載する記録を選んでいた。

出版社がその作業をし、私たち翻訳者に原稿が回ってくるのは、どうしても7月ごろになる。でも8月半ばくらいまでには翻訳を仕上げなければ間に合わない。作業は私を含め3人ほどで分担するが、一番暑い季節に、短い時間で相当な量の翻訳をこなさねばならないことになる。

それでも、ギネスだから内容は面白いし、世界での出版にさきがけて記録を知ることができる楽しみもある。私のところに来る英文原稿の段階で、もう既に写真や挿絵が入っており、こんな記録もあるのか、と感心したり呆れたりしながら作業を進めていく。

感心するのは、たとえば人間の冒険心や体力の限界への挑戦によって生み出される記録（酸素ボンベを持たずに単独でエベレスト登頂など）。呆れるのは、本人はいたって真面目に取り組んでいるのだろうが、周りにはユーモアたっぷりに見える記録（顔に最も多くの洗濯ばさみをとめた）などだ。

科学技術に関するページでは、最新の科学を調べて確認しながらの作業になる。文系人間の私では一般的な科学の知識も怪しいくらいだから、ギネスの記録になるような最新の科学となればほとんど未知の世界。まずはその専門の基礎知識をある程度理解してからでなければ日本語にできない。

それでも、ナノテクノロジーから宇宙技術まで、それこそ多種多様な記録があり、人間の能力には限りがないことがよく分かる。

スポーツの記録では、選手の名前や記録の数字を間違えないよう慎重に訳さなければならないし、映画や音楽のヒットや受賞の記録も、事実かどうかをネットなどでまず確かめる。

そうこうしているうちに、あっというまに時間がたってしまって、どんどん締め切りが迫ってくる。ついには昼夜を問わず自宅デスクのパソコンに向かうことになり、まさに缶詰め状態だ。

大判本の「ギネス世界記録」は、写真や装飾が多いわりに文字もびっしりと入っている。ものごとの記録だから、英語自体はそう難しくはないが、なにせ量が多いから、訳しても訳しても終わらない。そんなふうに焦り始めた時に「口にどれだけたくさんのストローをくわえられるか」というようなお気楽な記録に遭遇すると、苦笑してしまう。

もちろん、まじめな記録もたくさんある。人や動物の潜在能力の高さや自然の神秘に、新しい発見もたくさんあった。

日本に関係する記録もいろいろあり、双子姉妹の「きんさん」「ぎんさん」に始まって、史上最年少でプロゴルフツアーに優勝した石川遼くんや、200本安打の連続記録を更新しているイチロー選手なども印象深い。

「小惑星から物質を持ち帰った世界初の探査機」として認められたはやぶさや、「世界一高い自立型の電波塔」になった建設中の東京スカイツリーも、いずれ掲載されることだろう。

「ギネス」に限らず、こんなふうに思いがけない世界や事実を垣間見ることができるのも、翻訳という仕事の醍醐味かもしれない。

（徳島市在住）

船越さんが手掛けた「ギネス世界記録」。短期間にかなりの分量を翻訳しなければならない

新しい発見あり楽しみも